

み、立派に医師として役立つことを証明すると書いてある。医師免許証交付に当り恩師に頼んで修業証書の代りに発行したものと考える。

(獨協医大アレルギー内科)

67 明治期におけるブライト氏病の受

容について

会 田 惠

先の第九一回本会総会(平成二年四月)で、演者はブライト氏病の日本での最初の紹介について述べたのであるが、今回は明治期(一八六八—一九一一)の本邦において、本症がどのように受容されていたかについて概況を述べる。

先ずブライト氏病という呼称については貌麗都腎病(ポードイン日講紀聞)、ブリフト病(華氏内科摘要)、武雷篤病(内務省衛生局訳「七科問答」その他)、ブライト病(井上内科新書)と変遷がみられるが、概ね明治十年頃から武雷篤病という名称が定着しているようで、ベルツの内科書でも武雷篤病と記載されている。

ベルツは東大で病理学総論を十年間講義しているが、彼の内科書の急性腎炎の項には剖検所見を約一頁説明してあ

る。

同様にブライト氏病の病理所見は、「七科問答」その他訳書には説明されているのであるが、実際に本邦で明治期にブライト氏病の所見の記録は現在残っていないとみられる。

次に診断については明治九年二月に「慢性腎炎尿毒症」(医院雜誌)で「尿ヲ檢スルニ帶褐色ニテ蛋白ヲ含ム事甚ダ多シ」とあり当時より尿蛋白の定性から始まりその後試験管、顕微鏡の普及と共に沈渣所見を観察していると推定される。ただし尿沈渣は、当初は尿を放置後の観察であったとみられるが、明治三十九年の医科器械目録(京都「堂版器械店」)にはエスバツハ氏蛋白計、遠心力沈殿器(手動)沈殿管が紹介されているので何等かの尿検査により蛋白を認め、沈渣所見と共に診断を行なったものであろう。そして上記の目録に血圧計がまだ出ていないので、高血圧についての観察及び記録はまだ明治期には行なわれなかったと見られる。

大正十四年、朝倉文三が「腎臟疾患の分類及び治療」序文(以下述べている事は明治より大正期にかけて同様の状態で

あったものとみられる。「本邦ニアリテ軌近ニ至リ、病者ハ勿論医家モ腎疾患ヲ恐ルル事恰モ悪性腫瘍ノ如ク、治療ノ意義ヲ絶望的ノ地位ニ放置シタル傾向ニ置カレ、從テ診断ハ大多数ノ場合ハ、不治ノ慢性腎炎或ハ萎縮腎ト見做サレ療法ハ牛乳専用ニ甘ンジ、有望有意義ノ診断及治療ニ移ラザリシ如キ觀アリ……。」

また明治期の死亡統計に「腎臟炎ニ因リ死亡統計」が内閣統計局により「明治三十二年より同四十一年まで」にみられるが、これでは性別、死亡の場所、年齢、職業により分けて、死亡数をあげており、表記を腎臟炎及びブライト氏病死亡としてある。これは当時、なおブライト氏病として死亡診断書への記載があった事を示すものである。因みに明治四十一年は全国で二四、〇四七名とでている。

ヨーロッパではR・ブライトの発表後次々と研究され(ウイルヒョウ、トラウベ、アウレヒト、ジクレル等)、一九一四年(大正三年)には著名なフォルハルド、ファールによるブライト氏病の病因系による有名な分類が発表されているのであるがそれまでのブライト氏病の診断の分類は混然としていたようで、ベルツがブライト氏病の分類について、一

つの説を主張していた事をあげ（類症鑑別 明治四年）、また明治三十三年（一九〇〇）にしめされているブライト氏病の名称を使用しない腎炎の分類を紹介する（内科類症鑑別）。なお明治期において尿蛋白について、定性法をどのように実施していたかは未調査である。

（柏崎市）

68 Hirschberg 来日に会いし医師達

○奥沢 康正・ユルゲン・コバチ

明治二十五年九月十三日、日本に来日した Julius Hirschberg（一八四三〜一九二五）は東京・名古屋・京都・滋賀・大阪・奈良・神戸・長崎と二十五日間、日本縦断の旅を続け詳細な紀行文を *Um die Erde* 第四編「Japan」（一九〇四年刊）に、百三十ページにわたり記している。

Hirschberg が見物したのは観光地だけでなく各都市の医学部、病院等、以下の医療設備を訪問している。東京・東京大学医学部、井上眼科病院、赤十字病院、東京慈恵医院医学部。名古屋・衛成病院、熊谷病院、愛知医学部、愛知病院。京都・京都府立医学部、京都療病院。大阪・大阪医学部、大阪慈恵病院。神戸の私立病院（病院名不明）、長崎では官立第五高等中学校医学部（現在長崎大学医学部）。特